しゃらりん 05 2004/3/1
大阪教区教化委員会機関誌［沙羅林］

教区基本テーマ

私のこと 知らないままで いいのかな。

浅川 信子さん（56）

他人のことは、「ああだ、こうだ」と自分の都合のいいようにしっかり分析するのに、自分のことは嫌なものを見せず隠してしまい、良い所しか見ないでそれをよしとしている。自分のことは自分が一番よく知っていると思っているが、本当は何も分かっていない。難問があっても目をそらし向き合おうともしない。自分を知るということは、一人では難しく人との交わりの中から学び、教えられるものではないかと思います。また、仏法に出会い、聞法していかなければ、一生、自分のこと知らないままで終わってしまうのではないでしょうか。（第３組受念寺門徒）

北野 愛明さん（17）

僕はまだ自分のことがよくわかりません。どんなことができるのか、どんな性格なのか、よくわかりません。自分のことを知るということについて身近なことで例にあげると、テニスは女の人がやっているようなイメージが強く、やる気がしませんでした。しかし、友達に誘われたのをきっかけにやってみると、おもしろかったということがありました。これも新しい自分を発見したということだと思います。

自分を知ることは、目標や夢を持つことにもつながると思います。どのようなことをしていれば自分は楽しいのか、それを知ることによって目標や夢を見つけることができると思います。最初から「自分はこういう人間だ」と決めつけて何もやらないのはよくないと思います。僕もそうだったように、新しい自分を発見するチャンスをつぶしていると思います。自分を知るということは難しいと思いますが、僕は「自分」というものを意識してこれから頑張っていきたいと思います。

内山 宗之さん（57）

近年、科学の発達はめざましいものがあり、遺伝子の組み替えやクローン生物等、生命の根元にかかわる問題まで解明される時代になってきています。科学の発達と共に、人間は世の中が人間中心に、もっといえば自分中心に動いていると思い上がり、自分の意に添わないものは無視し、許せない存在と捉えるようになってきています。つまり、自分を見失っています。

しかし、我々真宗門徒は、自分の身一つをとってみても、心臓も肺も自分の意志とは無関係に働いており、また自分の生命を維持するために、生きとし生ける生命を奪っていることに気づかされ、大自然の働きに頭を下げ、自分が気づかず奪っている生命に思いをめぐらせる気持ちを持てるようになります。この事が、私のことを知るという事だと思います。「感謝」と「懺悔」が、自分のことを知ると生まれてくる言葉だと思います。「南無阿弥陀仏」は「お蔭様で」、「有難う」、「申し訳ない」という「感謝」と「懺悔」の言葉であります。

（第３組西元寺門徒）

田口 奈美さん（15）

自分の事は自分が一番よくわかっている。私はずっとそう思ってきました。でも、実際はそうではないかもしれません。私はまだ自分の事がわかっていないのかもしれません。

だから、このテーマを見た時、「どういう意味なんかなぁ」とビックリしました。今までお母さんに私の事を指摘されると「私はそんな人間じゃない」と思い、反抗ばかりしました。これからも反抗はすると思いますが、そんな指摘された所はよく考えてみて、「それが、本当の私だったのかなぁ」と思います。

1p 教区内の方々に、教区基本テーマを聞いて感じることを綴っていただきました。

2p BOOKSしゃらりん堂「私の一冊」

3p ビデオ『シロの聞法見聞録』のご紹介

4p シリーズ　聞く
●門徒女性と坊守の集い

5p 餅・古着ボランティア体験レポート

6p 教区内諸団体の活動紹介
●坊守会・保護司協議会

7p 教区アラカルト
●本山九日講

8p ちょっといこか
しゃらりんちゃん

ぶっくすしゃらりん堂

私の一冊

推薦／第７組本照寺 **沖野頼信**さん

ＳＦです。滅亡寸前のカピラ城から、梵天王に請われた釈迦族の王子シッダルタ太子は兜率天へ向かいます。

シッダルタ太子は天上界のすべての層が無残に荒廃していることに驚きます。

兜率天で梵天王からその原因解明を依頼され、諸悪の根源とみなされている阿修羅王に会うことになります。

はためく極光を背景に少女のすがたをした阿修羅王がシッダルタ太子を待っていました。

プラトンやナザレのイエスや弥勒菩薩や転輪王など、興味深いアイテムがいっぱい出てきます。

このＳＦのテーマは熱力学の第2法則、つまりエントロピーの法則です。

……すべての時間のすべての空間において、あらゆる秩序は崩壊し、エントロピーは増大しつづける……

このＳＦには大乗仏典のような雰囲気があります。仏典というのは、もしかしたらＳＦなのかも知れない、などと考えたりします。（http://www.honshoji.or.jp/essay/entro/entro01.htm）

『百億の昼と千億の夜』
作・光瀬　龍
早川書房（ハヤカワ文庫）
680円

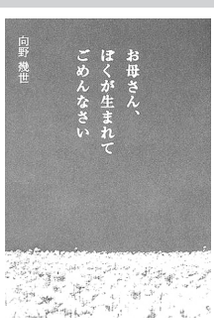
推薦／第２７組真善寺 **松林妃佐子**さん

生まれながらにして、重度の脳性マヒだったやっちゃんが「ごめんなさいね　おかあさん」と呼びかける詩にすべての感謝を凝縮させ、15歳でこの世を去ります。

この本は、20年以上前、今より障害がマイナスにイメージされていた時代、やっちゃんを中心とした障害を持つ子ども達と家族の苦しみや、喜びを、養護学校の担任だった向野幾世さんが書き綴ったものであります。

昭和53年に出版された本ですが、母と子の絆、家族の絆という永遠のテーマを問いかけ、愛が希薄になりがちな現代社会からの要請を受け最近復刊されました。

作品随所にある純粋な詩は、子育て真っ最中の私にとって、自分自身をみつめさせ、大きな愛を感じるものでありました。



『お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい』
作・向野幾世
扶桑社
1,143円

ビデオ『シロの聞法見聞録③』
～亡き人を偲びつつ～が完成!!

視聴覚伝道部のビデオシリーズ、『シロの聞法見聞録』の第3巻目がいよいよリリースされます。サブタイトルは『亡き人を偲びつつ』。1巻目の「清め塩」、2巻目の「お内仏」というテーマに続き、今回のテーマは「法事」。さて、今回シロはどんな「法事」を見つめるのでしょうか。教務所でご購入を承っております（予価2000円）。みなさま、ぜひお買い求めください。

「今回のビデオは何をテーマとして製作して行くか」というビデオ制作実行委員会の会議は、ほんとうに充実していて意味深いところがある。どんな内容を世間は期待しているのか、あるいはどんなものがウケルのか。いわゆるニーズに応えるための話を進める中で、それぞれの心の中にふっと浮かび上がるのは、「自分は何を伝えたいのか」ということ。大切な教化事業としてビデオを出すのだから、「こんなん面白ないわ」と言われることも避けたいが、それぞれ一人ひとりが問題になってないような事柄をテーマに作っても、それは気の抜けたサイダーのよう。「あんなテーマでいこう」「こんな企画はどうか」と語り合う中で、結局のところ借り物ではなく、今まさにご門徒と日々共にする中で、「このことだけは伝えたい」と言えるようなものに辿り着く。そこで決まったのが今回は「法事」ということである。

私たちは日々「先祖供養」という言葉の呪縛と戦っている。「先祖の供養をせなあきまへんなぁ」という言葉にはいつもどことなく苦笑いですり抜けている。「亡き人を偲びつつ」とは決して偲んで終わるわけではないという「つつ」だろう。今回のビデオでは、法事の前と法事の後というシーンに分かれて構成されている。亡き人への懐かしさと、苦くも才気煥発された人生の思い出を語る中で、その駆け抜けた「いのち」が今私に引き継がれている不思議さをあらためて感じる。そしてそのことは同時に生きることへの責任を問題にしてほしいということでもある。「わたしは何処から来て、何処へ行くのか」そんな自らの主体性と方向性を問うのが「法事」という場なのだろう。

撮影現場は緊張の連続である。台詞に感情がこもる。毎回のことでもあるがそれまで活字で見ていた文章が浮かび上がって来るようにさえ感じる。一つのシーンを撮り終えた役者さん達から一瞬こぼれる安堵感に満ちた顔からは、まさに真剣に台詞と向き合ってこられたのだなぁということが実感できる。私たちははたして「生きるということ」について真剣であろうか。

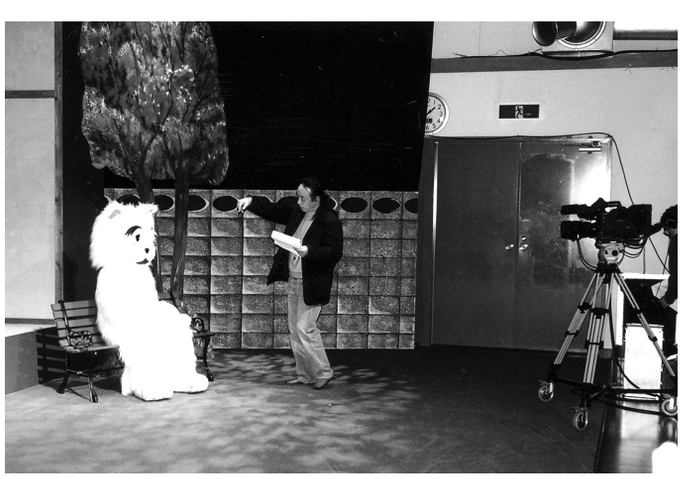
ビデオ制作実行委員会のビデオは、お寺の同朋の会や定例などのほんの最初の問題提起として利用していただければと考えている。お寺という場が「亡き人を偲びつつ、私が今を生きているということ（如来のみ教え）」を語り合える場であることをお寺もご門徒も期待しているのではないだろうか。

（脚本／廣瀬　俊）

◆
◇
◆

法事は何故勤めるのか。「亡き人を偲ぶ」とは、どういうことだろうか。このビデオは、そうした率直な問いから家族が語り合い、亡き人の言葉、在りし日の姿、生き様を思い出し、そうしたことを子どもに伝え、亡き人が何を願ってきたのかを、共に考える寸劇になっている。私たちは、仏事を通して、ほんとうに「諸仏」として亡き有縁の人々と出会っているだろうか。そんなことが問われる。

亡き人々を偲ぶことは、「今のあなたはどうなのか」と、自らの生き方が問いかけられていることであると思う。それとともに、その人たちが生きられた時代を見つめることでもあろう。



私たちは、生きにくい濁世に悩み多き身を抱え、「未来に向かって」忙しく生きている。それはもちろん大事なことであるが、時には「過去をふり返る」ことも大切なことではないだろうか。そのことによって、歩むべき道が明らかになり、人生がより深いものになるのではないかと思う。

今回のビデオは、遠い昔からの「いのちのつながり」にも思いを馳せながら、「今を生きる」大切な視点を提供していると思う。（ビデオ制作実行委員会／根津　茂）

●門徒女性と坊守の集い「いのちとの出会い」

講師／中村　薫　先生

中村先生から「いのちとの出会い」というテーマのもとに金子みすゞさん、今は亡き元ハンセン病患者の藤井善さん、先生の高一の娘さんの朋さんを通してお話していただきました。

金子みすゞさんの詩は目線が変わることによって自然や動物のいのちが見えてくることを教えてくれます。生きるために他のいのちを奪いながら、それらを当たり前のように思い粗末にしてしまう私たち。そんな痛みを感じない心が戦争やさまざまな事件をひきおこし、大きくは地球環境まで変えてしまうのではないでしょうか。

藤井善さんのお話では、先生でさえ家族に話すまで一年半もかかったということに驚きました。でも、そのことを聞いて先生の奥さんがハンセン病について学び、行動していかれる様子は女性ならではのパワーを感じて拍手したいほどうれしく、頼もしく思いました。隔離された人と、隔離せざるを得なかった人々とが出会うなかで、ともに解放されるということはこういうことなんだと納得しました。残念ながら熊本のホテルの宿泊拒否にもみられるように差別の根は深いですが、差別されてきた人と共に学ぶ場にしていくことが大事であると思います。

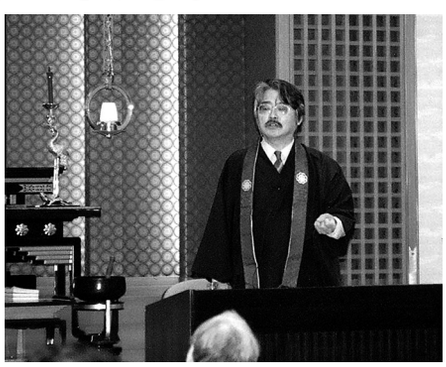
高一の娘さんのお話は同じ年頃の子どもをもつ私にとって身につまされるものがありました。

今や社会現象のように言われている不登校ですが、まわりにいる大人がどれだけ真剣に子どもと向き合えるのかが問われているのではないかと考えさせられました。

いのちとの出会いとは他のいのちに支えられている自分自身にめざめることなのでしょう。自分のいのちの中に存在する他のいのちに気づける感性を持ちたいと願っています。

（第19組長因寺　四ツ井眞知子さん）

◆◇◆



考えられないような悲しいニュースの多い今日、先生のお話しされた3つの事に共通するものである、「優しさ」「気づく」「いたわる」があれば、もう少し変っていたのでないでしょうか。

私の娘が小学生の時、「学級崩壊」の中で、娘を毎朝抱きしめて「頑張って」と送り出す。今考えれば、もっと他の言葉をかけられなかったかと。「頑張る」は、しんどい言葉です。頑張ってばかりいては、疲れます。彼女の心に気づく事も、優しい言葉も、いたわる事もできませんでした。

最後に「大阪のおばちゃん」は、3つの事を充分に備えています。（度が過ぎれば少々……ですが）一つひとつが簡単な事ですが、大切な事です。本当にいろいろと考えさせられた、良い時間をもちました。

（第19組光圓寺　小松幹子さん）

「いのちとの出会い」というテーマで、中村先生のお話しが始まり「人間のみが、自ら命を絶つ」（動物にはない）。この言葉に「そうなんだ」とうなづく間もなく、金子みすゞの詩「大漁」、「ハンセン病」、「朋さんの事」と続きました。

■講義要旨

現代社会に人間の優しさ、人間の温かさ、こういうものが見受けられないような状況になりつつあります。いろんなニュースを見聞きしますと、寒々とした、人間のいのちを奪ってしまう事柄がたくさん出ております。この尊いいのちを自ら引き受けていけないような時代社会、その中で優しさを感じとっていけたらと思います。優しさの「優」という字は、人が憂うと書きます。人の憂いが同感できた時に、人は人に優しくなれるのです。憂い・悲しみ・辛さが私に引き受けられた時に、人は人に優しくなれるのです。同情や哀れみではないのです。あなたもそうか私もそうだったよと、同じ心（感性）になれば、人は優しくなれるのです。仏教は、気づくことで、覚えることでないのです。なるほどそうかと気づかされていくことです。人の話を聞くということは、私に聞くのです。響くものが私の中にある、それが出会いなのです。いのちとの出会いというのは、人との出会いであり、言葉との出会いなのです。当たり前のことと思っていたことが、当たり前でなかったと気づかされていくような人間的な出会いなのです。「まず有縁を度すべし」という言葉があります。隣にいる人に声をかけ合っていく、それが私たちの出会いです。「いのちとの出会い」というのは、何か難しいことを覚えるのではなくて、親子・夫婦・兄弟・隣の人々が、あなたと出会えてよかった。私はあなたの親として、私はあなたの子として出会えてよかった、という人間性の回復でしょう。

（文責・教務所）

餅・古着ボランティア体験レポート

2004年1月8日・9日／主催・ボランティア会議

去る1月8日・9日の両日に行われた大阪教区ボランティア推進会議による「お餅・古着のボランティア」に参加させていただきました。

1日目は主に古着の仕分け、2日目は釜が崎への出発まで、届けられた餅のカビ取りをして切り分け、段ボール箱に詰め込みました。

かなり硬い餅もありましたがボランティアで来られた方々が頑張って切っておられました。

ワゴン車一杯に餅や古着を積み込んで別院を4時頃出発し一路釜ヶ崎へ。「釜ヶ崎炊き出しの会」で餅や古着等を下ろしました。

炊き出しの準備が出来ると大きな寸胴をリヤカーに載せて出発。炊き出しが行われる萩之茶屋中公園（通称四角公園）には大体180人程並んでおられ、延べ240食の雑炊が配られました。

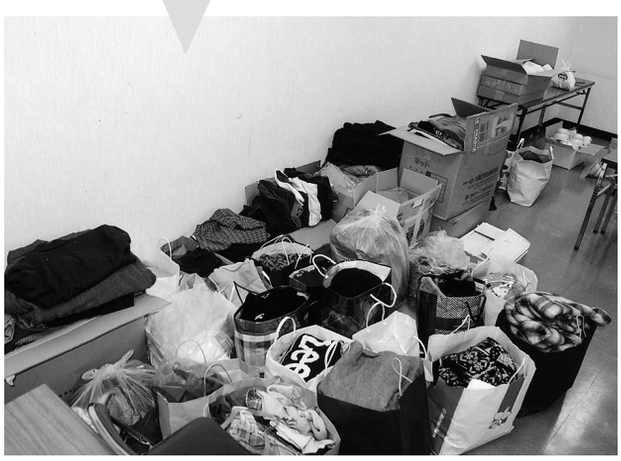
「釜ヶ崎炊き出しの会」の方に伺ったところ、朝は寸胴に2杯分、夕方は1杯分を配られているとのことでした。また、三角公園の南にある大阪市の宿泊施設（シェルター）の整理券が夕方に配られるため、夕方の炊き出しに並ぶ人が減ったそうです。

炊き出し終了後解散となりました。途中で車を降りて歩いて帰ったのですが、現代社会の現実に改めて驚くとともに、自分の認識不足に改めて気づかされました。

（久世）

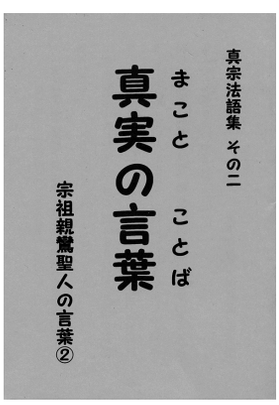
当日お寄せいただいた品々

餅（27件）		約250kg
古着	上着（ジャケット等）	94着
	ズボン類	116本
	その他（シャツ等）	295着
	マフラー等	25点
プルタブ（8件）		10kg
その他	しょうゆ	3本
	砂糖	2袋
	黒豆	1．2kg



BOOK しゃらりん堂

真宗法語集その二『真実（まこと）の言葉（ことば）』発売中！



発売以来好評をいただいております「真宗法語集／真実の言葉」の第2弾が発行されました。

今回は、「宗祖親鸞聖人の言葉②」として、ご和讃の中より、15首を選んで紹介しております。

前回同様、1部30円で頒布いたしております。みなさまぜひともお求めください。お買い求め、お問い合わせは大阪教務所までご連絡ください。

各種団体活動報告

坊守会

大阪教区坊守会規約第2条に「本会は、大阪教区寺院坊守及び寺族婦人を以て組織する」と述べられてあります。「坊守会」という名称でありますが、大阪教区すべての寺族女性が会員であるということです。

教区坊守会の事業を進めるにあたっては、柱として「学び」と「親睦・交流」が掲げられると思います。その上で、現在次の事業が行われています。

●定例学習会―講師に木越康氏（大谷大学助教授）を迎え、『教行信証』に「それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり」（真宗聖典152頁）とあるように、親鸞聖人が最も大切にされた『大無量寿経』に学んでいます。

●門徒女性と坊守の集い（大阪教区教化委員会共催）―門徒女性と坊守が共に南御堂で聞法できる貴重な場です。

●研修旅行―昨年は、親鸞聖人の足跡をたずねて、2泊3日で越後方面を訪れました。

●ハンセン病療養所邑久光明園交流会―昨年スタートし、園の手芸部10名程の方と簡単な手芸とおしゃべりを楽しんでいます。

●仏教讃歌を歌う会（難波別院共催）―毎月第1水曜日開催。歌詞をあじわいながら、ストレス解消にも一役。

●新年互礼会―年に一度楽しいひとときに親睦が深まります。

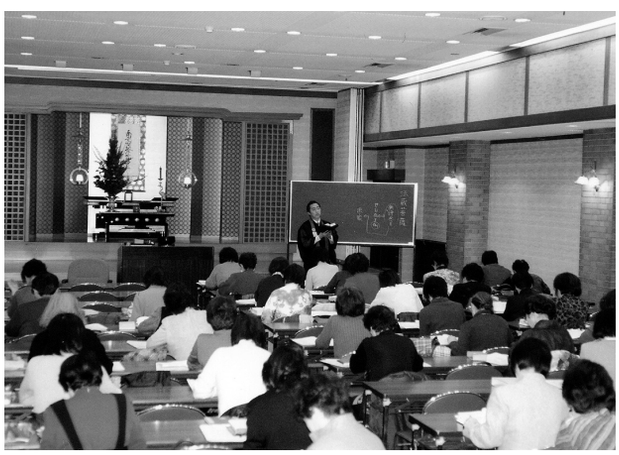
●坊守会だより発行―年1回会報発行

その他、真宗大谷派坊守会連盟研修会（本山）や近畿連区坊守会の諸事業に積極的に参加しています。

最近は、定例学習会など若い方の参加が多くなり、大変心強く感じます。教区坊守会においては、これからの宗門を担っていかれる若坊守の研修等を開催したいとの願いを持っているものの、実現には至っていません。若い方のご意見もお聞かせていただきたいと思います。

坊守会活動を通し、それぞれのお寺の興隆に寄与できればと願われます。

（大阪教区坊守会長　藤政稔子さん）



保護司協議会

この協議会は、大阪教区内寺院住職・坊守・寺族の方で、法務省委嘱をうけた保護司と、更生保護事業に理解、協力いただく方が集まり組織した会です。

保護司は、不幸にして罪を犯した人達の社会復帰を直接に援助すること、更に犯罪予防のための啓発啓蒙を行うことをその任務としています。保護司の委嘱を受けると、それぞれきめられた保護区に配置配属されます。各保護区には保護司会があり、各保護司会は府県の連合会が組織され、その会員となります。

保護司はボランティア活動で、実費弁償のほかは無給で、担当した対象者とつねに接触し面談して社会復帰を援助し、月1回その活動の報告書を提出することとされています。

大阪教区は四府県にまたがっているので、私たちの協議会では、各府県保護司会の動向などを知ることが出来ます。各地区保護司会や府県連合会では、その資質の向上をめざして、定例研修会等研鑽につとめていますが、教区の協議会では、更生保護事業は、自らの信心による教法の実践道として受けとり、この役務は念仏行の活動として聞法の場をもつことを心掛けています。

事業としては毎年7月に総会並に研修会を開き、あわせて「社会を明るくする運動」月間で、難波別院前の路上に出て、犯罪予防の啓発を実施しています。ほかに年2回理事会を開き、協議会の運営等を検討しています。適時、施設見学等を実施しています。

現在の会員数は50余名ですが、未加入の保護司の方々や、この事業に理解協力くださる方々のご加入をお願いします。また一人でも多く保護司に就任していただき、各地区保護司会に参加し、教化活動の一翼を荷っていただきたいものです。

（大阪教区保護司協議会会長　間野大雄さん）

教区アラカルト

本山九日講 於・茨木別院

年始めからの寒さが和らいだ1月9日、「本山九日講」の取材で茨木別院に出向きました。少し緊張して本堂へ入ると、開式30分前だというのにすでに満堂で、まだ入ってこられる方々もあり、後ろから押されるようにして座らせて頂きました。

10時、司会者の進行により始められ、崇敬寺院のご住職さん方も、間衣・輪袈裟で外陣に出仕されました。堂内に響く勤行の声を聞きながら、参集の方々と一緒にお勤めさせて頂きました。

毎年1月の初講には、本山より参務さんが出席され、『御消息・御文』の拝読、そして法話をされることになっているようです。

御消息の最期に、「自今已後、此講中退転なきようにいたさるべく候」というお言葉があり、ここに参集されている方々の先達が、370年の間相続されてきたご苦労は、私などには到底推し量ることの出来ない歴史であったであろうと思う時、回りの方々のお顔を見ながら、私も今この場に座らせて頂いていることに感動しています。

お講が閉会の後、引き続き総会が始まりました。このお講には、講則があり、運営されているようです。新役員の紹介、会計報告、今年の当番寺院の発表、昨年一度も欠席せず参加された方々の紹介がありました。総会も終わり、いよいよお斎が始まるようです。先程から外縁で用意されている粕汁の臭いがしています。順次、粕汁とお弁当を手に少人数づつ固まって食され、話をされています。私も声を掛けて頂き、暖かい粕汁を食しながら、話の中に入れて頂きました。この地域の方々にとってこのお講が生活の一部であり、信仰共同体であると、会場の空気から感じられました。

澤田秀丸輪番さんに、九日講が現在どういう役目を果たしているのか、という視点から、お話を聞かせて頂きました。

第一点は、自分とこのお寺とか、うちの村はとか、そこで止まってしまう門徒の組織の意識が、九日講は4つの区域になるわけです。昔はそれが30数ヵ村あったらしい。それらが垣根を乗り超えて、みんなが繋がって聞法する。まさしくそれは、教えの上から言うと御同朋御同行という意識の具現化したもので、それが現在もそういう形で活動しているということは、ある意味すばらしいと思う。

第二点目は、この講は完全に門徒の手で運営されている。これは、きわめて真宗的ですし、それが現在まで続いているということは非常に大きな力だと思います。

第三点めは、1年間通じて一回も休まずにあちこちのお寺へお参りしている人が20人くらいいる。そういう人を中心に皆が参加している訳で、いえば定例の聞法会のような役目を果たしています。行事としてするのであれば、1年間に3日なら3日、5日とやりますということになるが、この講が行事ではなく、日常の聞法活動になっていることがすばらしいと思います。

370年の歴史を背負っているが、単なる歴史を背負うだけでなく、現在もそういう活動をしていることがすばらしいと思います。

大桑斉先生のお言葉に、「真宗が住み着いている世界、真宗が住み着いているということ、それが身近なことになってしまっていて、そこに住んでいる人たちは自分の心に気がつかない何者かを住まわせておりながら、それが自分と違うものだということに気がついていない。ところが何かのきっかけで、自分の中に真宗というものが住み着いていると気がついたときに、その真宗とはどういうものだろうかと明らかにしていく、そういう作業に人々は関わるわけです」。（『日本仏教の近世』より）

今日一日、このお講の人々と出会い感じられたことです。

（渡邉）

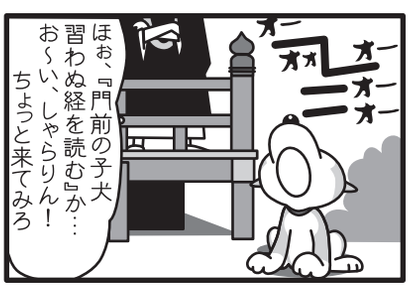
「本山九日講の歴史」

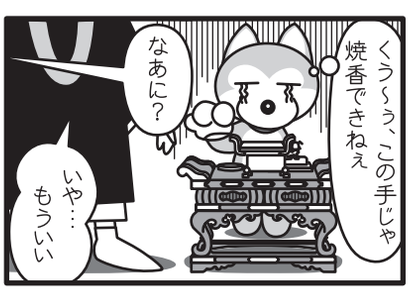
本願寺第十三世宣如上人時代に「九日講」が形成された。上人は「摂州、島上郡、島下郡、九日講中」宛に消息を送っている。

「本山九日講」と称され連綿と現在まで続き、370年程の歴史をもっており、現在は36ヵ寺（現茨木市、高槻市、摂津市、吹田市）の門徒により現在も運営され、毎年1月は茨木別院で、2月は蓮如上人創建の富田坊舎・教行寺で開かれることは決まっており、6月は研修旅行を行い、あと7回は順次崇敬寺院を当番に巡回している。

（『茨木御堂』誌　参照）

VS聞法見聞録 編





ちょっといこか

■南御堂周辺のお店紹介

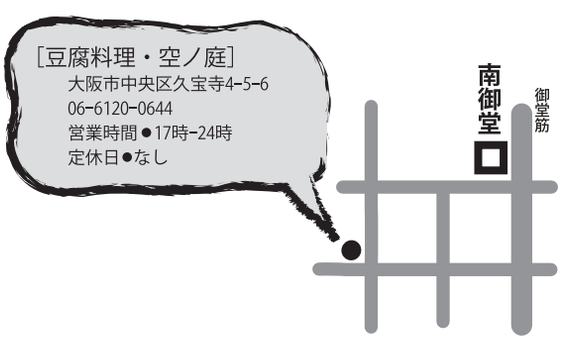
久宝寺「空ノ庭」

豆腐専門のお店です。まず入って客の入りの多さと、その客が若い女性ばかりなのに驚かされます。近頃の若いお嬢さんがたはこういうお店が好みなのね、とオヤジくさい感想を抱きつつ、ほとんどオヤジばかりの取材班は店内に入りました。店内はとても広く、内装はいまどきのシンプルな和風でおしゃれです。大小様々な個室もあって、20名くらいまでの宴会にも対応しているようです。

メニューはもちろん豆腐が主。豆腐は原料からこだわった無添加のもの。自家製です。オーソドックスな生湯葉や湯豆腐から、グラタン、ギョウザ、ネギトロ巻きまで、これでもかというくらい豆腐を使った料理の数々。食べてみると、自分がとても健康になった気がしてきます。たぶん気のせいでしょうけど。

そういうわけで、日頃脂っこいものばかり食していてヘルシーな気分になりたい人、近頃の若い女の人にうけたい人、歯の弱い人などに特にオススメしたいと思いました。

終わった後、しつこいようですがだいたいオヤジばかりの取材班は、中華料理屋で脂っこい二次会をしてしまったことを恥ずかしながら書き添えておきます。（澤田）



編集後記

◆「しゃらりん」第5号をお届けいたします。◆2004年を迎え、自衛隊イラク派遣問題・BSE・鳥インフルエンザ・中学生虐待事件等、暗いニュースが続きます。◆2月2日読売新聞夕刊「歴史のかたち」―口からの阿弥陀仏をみる―という記事が目に留まりました。一心に「南無阿弥陀仏」を称えると、言葉一つひとつが発する先から、六体の小さな阿弥陀仏に変わっていく。京都、六波羅蜜寺の空也上人像です。「身を捨てて人に尽くす。温かく慈悲のひたむきさ。そんな空也の姿こそ、日本人が回帰すべきありようではないか」と、元NHKプロデューサーの石井義長さんの言葉です。是非とも、拝ませていただき、改めて日本人として考え直したいものです。◆絵は得意ですが、文は全く苦手な私に、編集後記という重荷が課せられました。少しでもお役に立てればと思っております。各組・各ご寺院において、花の見どころや行事がありましたら、ご一報いただければ幸いです。これからもよろしくお願いいたします。（T）

発行日：2004年3月1日
発行所：真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町 4-1-11
06-6251-4720
発行人：比良正士
編集：第4組　常榮寺・久世見証
第12組　清澤寺・澤田　見
第12組　乗雲寺・渡邉延江
第17組　法観寺・廣瀬　俊
第27組　真善寺・松林俊明
イラスト：第27組　願隨寺・平野圭晋
第9組　看景寺・豊島幸代
http://www.icho.gr.jp/shararin/